

住文化の向上にどのように貢献できますか？

「人は住まいを創り、住まいは人を創る」。人間性豊かな住まいと環境の創造は、当社の社会的使命のひとつです。2005年に15周年を迎えた総合住宅研究所では、住まい手とともに暮らしの未来を創造しつづけてきました。

住文化向上への 広がり

地域、社会への広がり

- ・教育機関の体験見学受入
- ・公開講座の開催
- ・住まいの情報発信
- ・文化交流



住まいについて学習したり、自分の手で住まいのプランづくりができる「すまい塾」こだわり講座

住まい手との交流

- ・納得工房の開放
- ・「すまい塾」各種セミナー
- ・暮らしと科学のふれあい館「Annex Labo (アネックス・ラボ)」



総合住宅研究所
(関西文化学術研究都市内)



最新の研究成果を住まい手に直接発信し、暮らしや住まいをともに検証する「住まいのアカデミー博」

50万人

2005年8月に総合住宅研究所の来館者は累積50万人を突破しました。

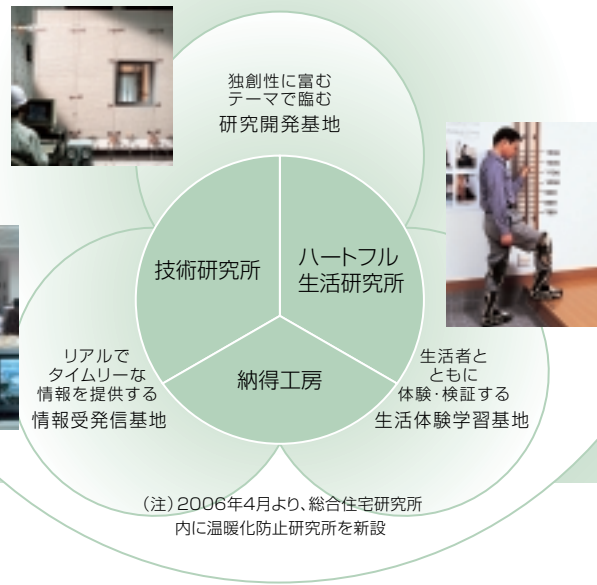
住文化向上のために総合住宅研究所の果たす役割

住まい手とともに

家は「買う」ものでなく「つくる」もの。生涯に何度もない大きな買い物をお客様にじっくり納得していただき、家族の暮らしを一緒にデザインしつづけていきたい—そんな思いから1990年に設立した総合住宅研究所は、技術研究所、ハートフル生活研究所の2つの研究所と納得工房からなります。納得工房は、お客様と従業員と一緒に、体験し、検証し、納得してから住まいづくりを始めるための出発点。家は洋服や靴のように、試着できないものです。完成し入居してから「こんなはずでは…」という思いをお客様に抱いてもらわ

ないためにも、体験と納得をコンセプトに開設しました。体験された住まい手の暮らし方に関する生の声は、研究者にフィードバックされ、研究・開発に役立てています。

2005年8月には、この総合住宅研究所への来館者が50万人を突破。このうち約4割が住まいづくりをご計画のお客様で、残りの6割は、学生や行政、地域住民など一般の方々です。今後も、住まい手に開かれた研究所として大きな役割を果たし、変化しつづけるライフスタイルに迅速に対応し、住まい手とともに歩める施設であることを約束します。



(注) 2006年4月より、総合住宅研究所内に温暖化防止研究所を新設



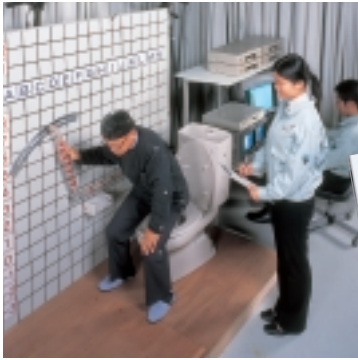
「すまい塾」公開講座



アネックス・ラボ



親子で体験・子育て支援塾



老化や身体障がい研修体験ができる「GARO体験」



「すまい塾」公開講座を紹介する「誌上公開講座」

暮らしの夢を語り合う

2005年2月、先進技術や最新技術を基盤に「暮らしの夢」を住まい手とともに語り合える場として「アネックス・ラボ」を建設しました。住環境の未来を見据えた研究モデル住宅として発信し、提案力や技術力の向上を担っています。

一般来館者にも開放し、生活者の本音を探求および検証する場として活用し、その内容を研究に反映させると同時に、新しい技術の研究開発の試作検証の場としても活用しています。また、さまざまな立場の従業員の生活体験研修の場としても活用し、住まい手とともに「暮らしの夢」を語り合い、住まい手の生涯満足と住まいの将来価値を追求した提案ができる従業員を育成しています。

手で触れて、からだで感じる施設

住まいの体験学習施設として「納得工房」を開放しています。納得工房は、一般の住宅展示場のような視覚情報だけでなく、手で触れたり、からだで感じ取るなど、五感をフルに活用した体験の中から、住まいの知識を自分のものにしていく場です。また、住まいのあり方を、住まい手とつくり手が同じ場で考え、住まいづくりの大切さ、楽しさを共有できる場でもあります。

一般の方々を対象とした「すまい塾」では、納得工房での学習体験を半年程度時間をかけて住まいについて学んだり、自分の手で納得できるプランづくりができる「こだわり講座」や、さまざまな分野から講師を招き、平均100名を超える来場者があるセミナー形式の「公開講座」を開き、住まい手や地域の方々との交流を図っています。

広がる出会いの輪

塾生から「学んだことを活かして最高のわが家を実現できた」「積水ハウスの姿勢に共感した」などの声をいただいたり、そこから色んな出会いの輪が広がったりということが、とてもうれしいですね。事業所版すまい塾など、全国でも展開している「すまい塾」では、「住まいづくりに積極的に参加したい」との意欲を持つ方々の期待に今後も応えていきたいです。

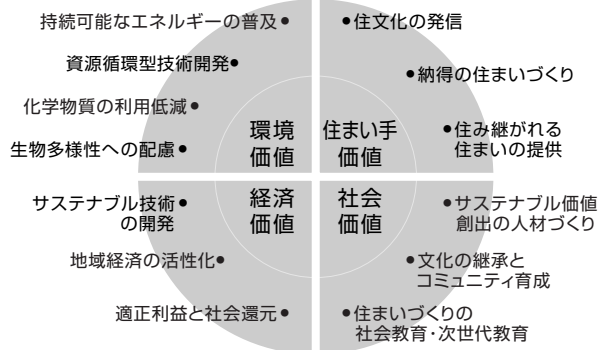


納得工房
情報企画グループ
有村 雅子

総合住宅研究所のあゆみ

- 1990 4月 総合住宅研究所オープン
- 9月 納得工房オープン
- 1992 5月 すまい塾開講
- 1993 10月 来館者10万人達成
- 1997 11月 NPO「西山卯三記念・住まいまちづくり文庫」オープン
- 1999 12月 来館者30万人達成
- 2000 4月 資源循環型住宅技術開発プロジェクト
- 2001 9月 すまい塾公開講座 第100回 達成
- 2003 5月 ハートフル生活研究所発足
- 2005 2月 「アネックス・ラボ」完成
- 8月 来館者50万人達成
- 11月 「住まいのアカデミー博2005」開催

4つの価値Map



Web コンサルティングハウジング | 住文化の向上・教育支援の考え方・方針 | 住文化の発信 | 教育支援 | NPO・NGOとの協働
はWebをご覧ください。

“家から変わろう、サステナブルへ”

2006年2月23日、「住まい手に開かれた研究所」である総合住宅研究所に、公開シンポジウムという形で住まい手や環境やまちづくりの専門家、当社研究者が集い、それぞれの立場から当社のサステナブル活動を振り返るとともに、これからの住まいがめざすべき方向と課題について話し合いました。



シンポジウムの概要

プログラム

- 総合住宅研究所見学会
- サステナブルデザインハウスプロジェクト報告
- パネルディスカッション

参加者：会社員（22名）、学生（21名）、主婦（11名）、その他（18名）、従業員（72名） 計144名



納得工房やアネックス・ラボの見学会



サステナブルな家とは？

松平さん:日本の家づくりに関して私がいちばん思うのは、手に入れたときがいちばん良くて、後はどんどん価値が下がってしまうという固定観念があるのではないかということです。しかし、そういった考えは世界を見渡すと少数派で、家族の歴史や生活を受け止めることができる「本物の家」というのがサステナブルな家ではないでしょうか。

広原さん:私は、「スローライフ社会」、お互いが愛情など色んな形のネットワークで結ばれている「個人ネットワーク社会」、「知縁社会」という3つのキーワードがサステナブルな家を考える上で大切になってくると考えています。

星野さん:ここの施設にもありましたが、「納得する」というのが非常に大事なのではないでしょうか。自分が安全・安心であるということ、自分が気持ち良いと感じられるものを取

り入れること。そうした感覚があってこそサステナブルだと思います。

小出さん:私は家を建てる際に季節や自然を感じられるようにしたいと思っています。今の時代は何もかもがキレイで便利になりましたが、何かもっと大切なものを忘れつつあるんじゃないかと思っています。

竹節さん:子どもを持つ親としては、安全や安心、環境ということに配慮していただければと思っています。

岡本さん:寝室や住居という最低限なものは確保されているわけですから、後は自分たちの今までのライフスタイルを変えていくという責任感が必要ではないでしょうか。

西澤:完成して終わりではなく、お客様に対して入居後満足をどう考えるかをこれからの設計として考えなければなりません。



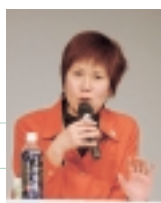
コーディネーター
「家族と自然にやさしい暮らし」を提案するリクエストマガジン 日経BP社 エココム・プロデューサー
松平 悠子氏



NPO、企業、行政のネットワークをつくる
国際青年環境NGO A SEED JAPAN コミュニケーション担当理事
星野 智子氏



長年にわたり、住まいと街づくりを研究
京都府立大学名誉教授、NPO法人西山如三記念すまいまちづくり文庫 副理事長
広原 盛明氏



すまい塾で老後の終の住まいを設計
すまい塾卒業生
小出 敦子氏



すまい塾卒業後に大学で建築を学ぶ
すまい塾卒業生
竹節 直子氏



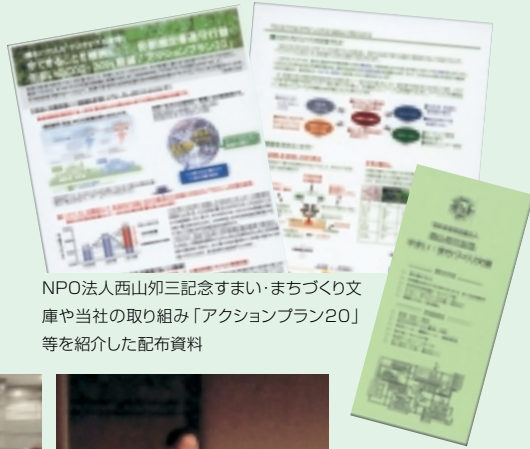
すまい塾で設計した趣味の住まいを建築中
すまい塾卒業生
岡本 澄夫氏



製品開発部門の総責任者
積水ハウス株式会社 開発部長
増地 秀夫



住宅、まちなみ設計、商品開発を多数手がける
積水ハウス株式会社 総合住宅研究所 納得工房長
西澤 良雄



NPO法人西山卯三記念すまい・まちづくり文庫や当社の取り組み「アクションプラン20」等を紹介した配布資料



サステナブルデザインハウスプロジェクトの報告

これから求められる家とまちやコミュニティとの関係は？

広原さん:高齢社会が到来する中で、定年後もその地域で20年近く過ごさないといけない。そのためには「徒歩生活圏」つまり足で生活できる環境というのが決定的に重要になると思うんです。

星野さん:家というのは最小限の社会単位ですから、さまざまな社会問題を家族や地域の人と一緒に考えたり、学んだりする場になるのではと考えてみました。

西澤:当社の街づくりでは、「まつり」をコミュニティづくりのしくみとして取り入れる試みもしています。「まつり」を中心に人が集まり、ごみも皆で拾いあう。こういうものを文化として継承していくことが大事だと思っています。

小出さん:各世代が別々に住むのではなく、一緒に住めるような街づくりがあれば良いと思います。

竹節さん:私の街では、子どもが登下校の際に、見ず知らずのお爺ちゃんやお婆ちゃんが見守ってくださるんですね。そういう社会っていうのは、すごくうれしいし、頼もしいし、住みつけたいって思いますね。

岡本さん:徒歩圏内のコミュニティの暮らしに必要な施設が凝縮されている。例えば、ごみの回収でも効率の良い経路でできるだけエネルギーを使わないしくみなどによって地球環境にもやさしく、自分たちの住まいも充足していけるような社会であれば住みたいですね。

松平さん:英語で“カンバセーションピース”というものがあるのですが、これは、皆の話題づくりのきっかけになるものという意味で使います。例えば、朝顔を育てているのが通から見える家があると、それを見て自然に会話が生まれます。その家が街に対して閉ざしているのか、開いているのかが伝わり、家から地域に発信できることもあると思います。

積水ハウスに期待することは？

広原さん:街の雰囲気に溶け込んでいくような「目立たない家」。時の流れに合わせて「上品に老ける家」。そして、そこに人が集い、話題があるような「縁を育てる家」をつくってもらいたいと思っています。

星野さん:街づくりや家づくりといったところから「地域再生」というものに貢献していただけたらと思います。もうひとつは、「アクションプラン20」のような取り組みを進め、他社を引っ張ってほしいと思います。

小出さん:狭くても効率よく快適に暮らせる空間づくりを考えていただけたらと思います。また、一消費者としては、もう少し簡単に手が届きやすいものにしていただけたらと思います。

竹節さん:地域の景観や地形などを取り入れたりという試みはこれからもつづけていってほしいと思います。

岡本さん:建物というのは時間がたてば愛着もわく一方で、劣化や機能低下もします。住み始めてからも、いろんな相談にのっていただき、学ぶ機会をつづけていただきたいと思います。

増地:お客様とともに住まいの規範をつくっていく、品格のある良い会社にしていきたいですね。これはこれからの住まい方、モノづくりにもつながってくるかと思います。

松平さん:まずは、年がたっても美しく、余分なものをそぎ落とした「シックでシンプルな家」。本物というのは何なのかを考えていただきたいと思います。もうひとつは、消費者とともに歩んでいただき「育む」ということを大事にしたいです。日本のモノづくりに対して消費者は一定以上の品質は当たり前になってきている中で、選択肢に残るかどうかは企業姿勢というか、CSRへの共感がこれからとても大事になってくると思います。

公開シンポジウムを受けて

参加者の方からは、当社の取り組みについて高く評価していただいた一方で、「どのように住み継がれる住まいをつくっていくのかを明確にしてほしい」「このような意見交換の場をもっと増やしてほしい」といった課題もご指摘いただきました。今後もさまざまな機会を通して皆様と対話を行い、住宅業界をリードしていけるような取り組みを進めてまいります。そして、さらに地球に配慮した住宅を考えていきます。

積水ハウス株式会社
取締役・専務執行役員
技術・設計担当
和田 純夫



次世代の住まいのために、何をしていますか？

未来の持続可能な暮らしのために、私たちはどんな住まいを提供できるのでしょうか。積水ハウスは、これからの住まいのあり方を住まい手とともに考え、広く世に問う研究開発プロジェクトをスタートしました。

都市におけるサステナブルな住まいとは

東京都国立市の一画で、積水ハウスが開発を進めるサステナブルデザインハウス(SDH)の建設が進んでいます。これは、持続可能な社会に相応しい住まいを研究するための実験住宅。開発にあたっては、さまざまな部署から集まったプロジェクトメンバーの間で活発な議論が繰り返されました。都市部の住宅においてどのような持続可能な暮らし方が提案できるのか…。その結果出てきたのが、「木に学ぶ家」と「日本の暮らし」という2つの視点です。

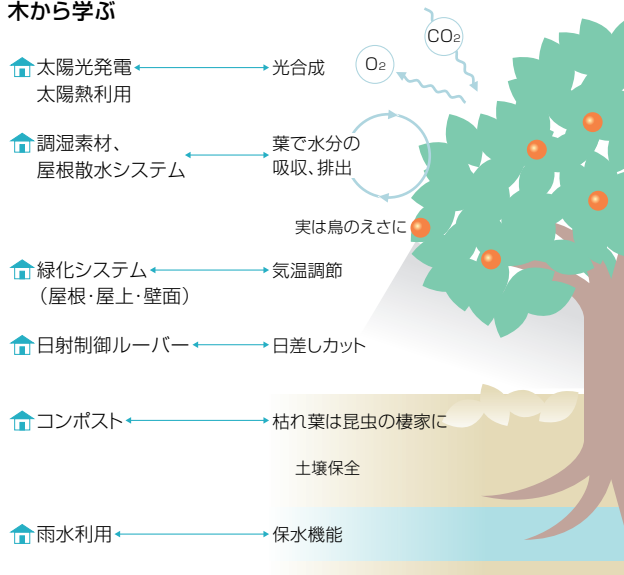


商品企画部、開発部など6部署のメンバーで構成されるプロジェクトチーム

自然の循環を支える木の働きに学ぶ

木は、太陽のエネルギーを栄養に変え、雨水と土の養分で生長します。排出するのは酸素と枯れ葉。枯れ葉は土壌の養分になり循環していきます。この循環のシステムに学び、住まいに活かそうというのがSDHのコンセプトです。SDHは自然の一部となるような住まいをめざしています。

木から学ぶ



日本の暮らし

2つ目のキーワードは「日本の暮らし」。古くから行われてきた季節ごとの慣わしや行事は、日本の風土をうまく利用して心豊かに暮らすための知恵でもありました。自然から離れるのではなく、自然と親しむことによる快適さを実現するため、縁側や通気天窓など、日本の伝統的な住まいが持っていた工夫を随所に盛り込み、四季のうつろいが感じられる暮らし方を提案しています。

プロジェクトの リーダーに聞きました



プロジェクト
リーダー
商品企画部
木村 文雄

Q.開発において特に力を入れたところは？

A.「暮らし方」について特に力を入れました。夏の夜には縁側で夕涼み、秋には作物の収穫を楽しむ、冬には火を囲んで家族が語らうなど、日本の四季や自然と親しむ暮らし方に住まい手をいざなうことができると考えています。

Q.サステナブルな住宅であることはどのように検証しますか？

A.サステナビリティの度合いを定量的に測ることは非常に難しいと考えていますが、4つ

の価値の視点から、細かい評価指標を策定し、評価可能なくみを考案中です。

Q.この実験住宅をどのように活用していきますか？

A.モニターのご家族に住んでいただいたり、子どもたちにサステナブルな暮らしの意味を伝える絵本をつくったり、有識者の方に評価・検証していただくなど、多くの人々に参画していただき、新たな住まい方を考える場として活用していきたいと考えています。



屋根緑化

屋根を緑化することで、蒸散作用により温度を下げます。

自然と調和した
暮らしを楽しむ



家ナビゲーション

エネルギーの創出や消費の状況、住居内外の環境状況がわかります。
※写真はイメージです。



完成後はモニターの居住による検証や、情報の発信基地として活用

Sustainable design house サステナブルデザインハウス

企画・設計の詰め作業を経て、建設進行中



竹の廃材を有効利用したユニークな工事用仮囲い

エネルギーを
効率よく利用する



ペレットストーブ

ペレットストーブの火を囲むことで、家族の団らんを育みます。また、間伐材を利用した環境にやさしい木質ペレットを燃料にしています。

地球環境に
やさしい材料を使う

日本の暮らし 縁側スペース

1階には、心地よい光が降り注ぎます。縁側は、光や風が通るスペースになり、気温調節の役割を果たしています。また人々が集うコミュニティスペースとしても利用できます。

プロジェクトの第2ステージ

SDHは2006年5月に完成しますが、プロジェクトはそこで終わりではありません。完成後は、いろいろな分野の専門家や研究者、生活者の方に意見をいただくコンソーシアムの場、地域コミュニティとの情報交流の場、技術テーマの実証・検証の場にしていきます。さらに、このプロセスから得られるノウハウや技術を今後の商品に還元し、次の時代を見据えた住まいづくりに活かしていきます。

4つの価値Map



Web 居住時のCO₂排出削減の取り組み

国家プロジェクトへの参画 | はWebをご覧ください。

CO₂の削減目標は達成できますか？

家庭からのCO₂排出量は、この15年間で約30%増加しています。住宅と関わりの深い家庭部門の排出量削減に向けて積水ハウスはどのように貢献できるのか。私たちの取り組みを紹介します。

京都議定書遵守に貢献するために

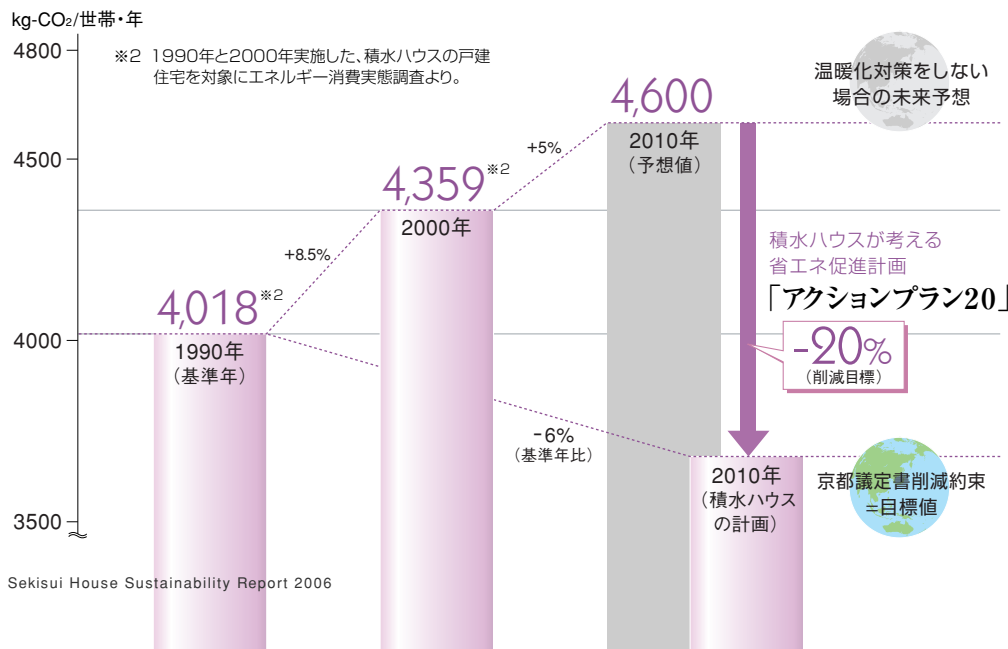
「私たちは京都議定書^{*1}の目標達成に向けてどんな貢献ができるのだろうか。」京都議定書が発効した2005年2月、積水ハウスではサステナブル宣言の発表に向けた準備を進めていました。家庭部門から排出されるCO₂は、日本全体の約13%。住まいを提供する企業として、家庭から排出されるCO₂の削減は大きな使命です。お客様へのアンケートでは、地球温暖化防止のためにお金や手間がかかることに抵抗があると感じられる方が半数近くおられることがわかりました。この方々にも受け入れられる提案でなければ大きな効果は期待できません。検討の結果、高効率給湯器エコジョーズを従来品と同じ価格で全戸に標準採用することが決まりました。これにより、今までと同じような暮らし方でもCO₂排出量の削減が可能になりました。大幅なCO₂削減が期待できる次世代省エネ仕様は当社住宅では2003年にすでに標準化されており、さらなる削減には、居住時のCO₂排出量の約3割を占める給湯エネルギーの削減が必要でした。

当社はこの行動目標を2005年4月に行ったサステナブル宣言において「アクションプラン20」として発表。次世代省エネ仕様に加えてエコジョーズを標準採用することで、当社新築住宅でのCO₂排出量は目標数値の20%削減を達成することができます。また、太陽光発電システムの普及にも取り組んでいます。アクションプラン20を推進するために大幅に価格を下げて販売しています。次世代省エネ仕様、エコジョーズ、太陽光発電システムの設置により、2005年度における新築住宅全体のCO₂排出削減量は21,550t-CO₂にも上ります。

これらの取り組みをより多くの方にご理解いただけるよう、延べ1,500人の従業員に対してアクションプラン20の意義を学ぶ研修を行ったほか、このコンセプトを商品化したエコライフモデルシリーズの発売、環境広告を通じた企業メッセージの発信などを行っています。

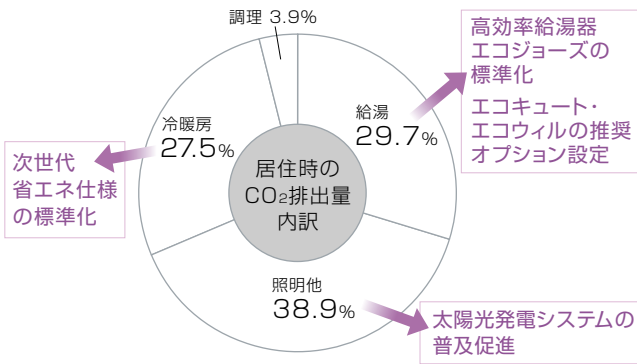
^{*1} 地球温暖化を防止するために各国の温室効果ガスの削減目標を定めたもの。日本は2008年から2012年の間に1990年比で温室効果ガスの排出量を6%削減することが義務付けられている。

CO₂削減目標



1990年から2000年までに1世帯当たりのCO₂排出量は8.5%増加しました。さらに2010年までには約5%増加すると予測し、京都議定書で定められた6%削減を達成するためには、対策をしなかった場合と比較して20%削減する必要があります。アクションプラン20では確実にCO₂排出量を20%削減するための施策として「次世代省エネ仕様」と「エコジョーズ」を標準採用しました。その上でさらなる削減を進めるためにエコウィルやエコキュートなどの高効率給湯器や太陽光発電システムの普及につとめています。

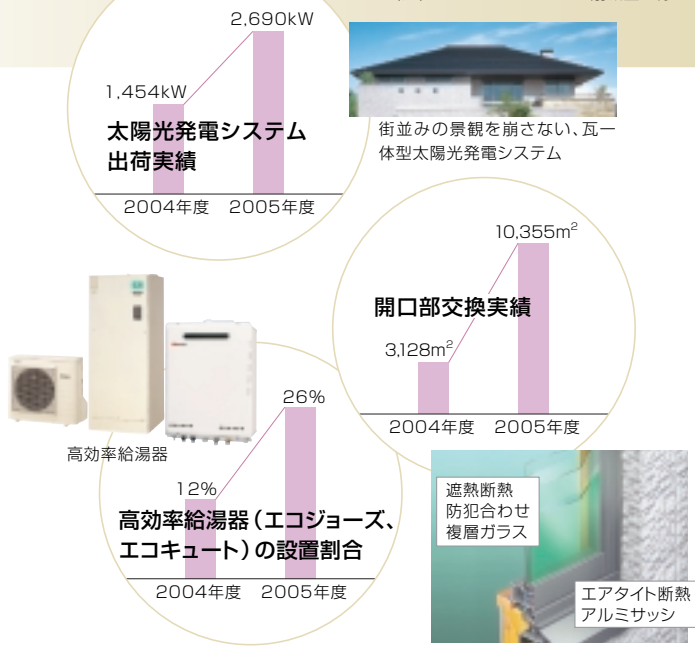
家庭部門の用途別CO₂排出量とアクションプラン20の施策



CO₂排出削減量(2005年度)

21,550 t-CO₂

(注)リフォームによるCO₂削減量は除く



既築住宅におけるCO₂排出削減

新築住宅だけでなく、これまでに当社が建築した既築住宅約70万戸についてもCO₂排出量削減活動を進めることが重要です。当社では「断熱改修の推進」「高効率給湯器への変更」「リフォーム用太陽光発電システムの普及」を柱として取り組んでいますが、2005年度は断熱改修のための開口部の複層ガラス化に力を入れました。高性能複層ガラスへの変更は10,355m²に上りましたが、今後はさらに実績を伸ばすとともに、高効率給湯器や太陽光発電システムの普及率向上のための施策を進めていきます。

リフォームでCO₂削減に貢献します

リフォームされるお客様に窓を高性能複層ガラスに交換することや高効率給湯器の設置をお勧めしています。高性能複層ガラスへ交換されたお客様からは窓からの暑さ、寒さが軽減され、快適になったと好評です。最近は太陽光発電などへの関心が高いお客様が多くなってきているように思います。私たちも商品や省エネルギーについてより専門的な知識を持つこと、つねに新しい情報をお客様に提供できることが重要だと感じています。



積水ハウスリフォーム(株) 事業部 吉田 忠司

環境会計

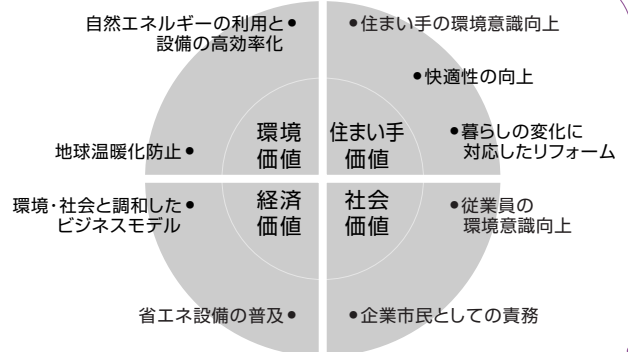
環境保全活動	環境保全コスト		経済効果*3	経済収支
	投資額	費用額		
新築住宅における太陽光発電システムおよび高効率給湯器のコストアップ分を負担	0	679	0	-679

※3 「経済効果」は原則として、環境対策を実施した場合に、実施しなかった場合と比較して削減される費用などを確実な根拠に基づいて算定しており、アクションプラン20の推進による利益寄与の推定的効果は含んでいません。

顧客における環境保全効果	
居住時のCO ₂ 排出削減効果*4	16,120t-CO ₂

※4 太陽光発電システムおよび高効率給湯器の導入による、耐用年数分のCO₂排出削減効果。計算上の耐用年数を太陽光発電システムは20年、高効率給湯器は10年としています。当社がコストアップ分を負担した設備機器のみが対象です。

4つの価値Map



Web 最適なリフォーム | 戸建住宅 | 環境会計 | 住宅のエネルギー消費 | 居住時のCO₂排出削減の取り組み
はWebをご覧ください。